具体性の弁証法[1]
――ベンヤミンにおける過去と現在

平野篤司

1

アドルノは，自他共に許す弁証法論者である．その代表的著作のひとつである『否定の弁証法』[2]などを検討すれば，その思考を弁証法と呼んでよいのかと躊躇を覚えるほど特異な弁証法であるが，その枠組みはその名に恥じることはあるまい．アドルノの思考は，隅々まで言葉の真の意味でラディカル（根底的）であって，彼一流のラディカリズムに裏打ちされた弁証法もその姿を消尽するかと見えるほど極限まで駆使されて始めてその輝きを発揮するというような類のものであって，その一貫性には，驚嘆する以外はない．盟友ベンヤミンも時局の切迫と不可分のマルクス主義への接近の頃には，しきりと弁証法を強調している[3]．あるときは，まるで思考の切り札としてさえこの用語がもちいられているのである．しかし，ベンヤミンの思考を一般的な弁証法という概念で括ることがふさわしいこと

（1）この表題は，論者がベンヤミンの思考を跡付けていくうちに浮上したものだが，同時に20世紀チェコの哲学者カレル・コシーク（Karel Kosik 1926–2003）の著作『具象の弁証法』（Dialektik des Konkreten 1958年刊）から触発されたものでもある．

（2）Theodor W. Adorno, Negative Dialektik, Frankfurt am Main 1973

（3）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, Gesammelte Schriften Band 1, 2, Frankfurt am Main 1974, S. 702 など

かといえば，それには大きな疑問を覚えざるを得ない．

弁証法的思想は，ベンヤミンの生きた時代において歴史的唯物論という形をとる．エッセイ『歴史の概念について』(4)にみられるように，ベンヤミンがこの思想を真剣に考察していたことに疑いはない．『歴史の概念について』のはじめに，テーブルのなかに潜んでいるチェスの名人である「せむしの小人」に操られた「歴史的唯物論」という名の人形がいつでもゲームに勝利するというはなしが語られている．この比喩は，不気味な味わいをもっているが，生涯幻想と幼児性への偏愛を強く抱いていたベンヤミンならではの詩的形象化の一例である．ここで，歴史的唯物論が常に勝利するという主題は，メルヘンのような枠組みも与かってなかなか勇ましくもあり，微笑を誘うところもあるように思われるが，この論のなかで展開される歴史の概念は，なかなかもって微妙である．そもそも歴史的唯物論は，歴史のなかで常に勝利を収めてきたのであろうか．これが書かれたのがベンヤミンの最晩年 1940 年とされているが，当時のヨーロッパの戦時状況ならびに追い立てられる亡命ユダヤ人ベンヤミンを取り巻く生活環境の劇的悪化という事態を考えてみれば，歴史における唯物論の勝利とはとても声高に語ることはできなかったであろう．歴史はむしろ敗北に敗北を重ねてきたのではなかったか．また，歴史的唯物論の理念が現実との弁証法的関係性のなかで高次の総合を成し遂げたといえるだろうか．これもありえないことであったろう．救いがたい絶望的な現実を前にして，ベンヤミンは，なおも歴史的現実に現実的に対抗しようとしたのか．これも否であろう．圧倒的な黙示録的状況に立ち向かう困難ということよりも，ベンヤミンの姿勢は，対決する対象に対してそれと同じ次元で同じ論理で立ち向かうことはないからである．それともロマン主義者のように今は少なくともこの地上にはありえない夢の世界を思い描いたのであろうか．そういえるかもしれない．だが，もしそうならば，それは過酷で厳しい現実認

（4）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte

識に見合うだけの強度を持った夢でなければならぬ．ロマン派の抱く夢が輝きを持っているとするならば，それは過酷な現実の厳しい認識に裏打ちされているはずである．ドイツロマン派を代表するF.シュレーゲルやノヴァーリスといった過激な批評家であるとともに詩人であった者たちへのベンヤミンの共感の深さは，彼の『ドイツロマン派における批評概念』(5)にも明らかに読み取れる．ベンヤミンは，そこで自らの精神的血統を確認しているかのようである．彼の最後の著作といわれている「歴史の概念について」にもそれは，うたがいなく確認できる．しかも，理論的なマニフェストというだけでなく，時代と生の切迫に強いられた遺書のような一回性のことばとして．われわれは，彼の夢の志向性と強度を受け止めなければならない．

夢は，フロイトによるまでもなく，ただそれ自体で成立するのではないだろう．われわれの存在の全体性のなかで立ち現れるはずである．その表れは実に多様であり，一概に規定できないとりとめのなさをこそその特質としている．おそらく「夢判断」というものもひとつの合理的な解釈であって，夢における人間存在と世界の全体性は隠されたままでとどまるのであろう．だから，象徴的な解釈や理解も一定程度の有効性は持ちえても，夢の世界の全体性を一挙に把握するのは困難であろう．なぜならそれは人間存在の全体性に見合うものだからだ．ベンヤミンにおける夢のありようは，彼の存在そのものに根ざす本質的なものであるといえよう．一義的な規定を嘲笑うかのようにすり抜けるイメージの数々は，あまりにも独特なものであって，他の追随を許さない．

現実認識に対して，その対極として夢の世界が呼び出されるという面は，ベンヤミンにあっても否定はできない．現実の乗り越えこそドイツロマン派以降思想上の本質的課題であったのだ．ベンヤミンも例外ではなく，そ

（5）Walter Benjamin, Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik, Frankfurt am Main 1973

れと取り組んだといえるだろう．ただし，その格闘のありようは，やはり並大抵ではない．現実にたいしてそれを乗り越えるものを対置することは，たとえばノヴァーリスの中世的カトリシズムの世界への憧れと回帰に明確に見て取れる．また，彼のメルヘンへの愛着もそうした表れであったろう．そこには，何か決定的なものが失われたというような大きな喪失感情が世界認識の根底にある．目の前に横たわるのは，統一世界という壮大な伽藍が崩壊し果てた後の瓦礫からなる廃墟の風景である．ここには，前進的な進歩の観念はうかがえない．この先に開かれてゆく夢の世界は，いかに濃密ではあっても，いかに輝かしくはあっても歴史的には反動的な色合いを強く帯びることになるだろう．ベンヤミンがノヴァーリスのこのような世界に強い共鳴を覚えていたことは確かであろう．バロック演劇における廃墟としての世界，複製技術時代の芸術作品論における認識的基盤すなわち失われたアウラ，幼年時代の回想，ロマン主義論における批評の位置づけなど，ほとんどあらゆるところでベンヤミンは決定的に失われたものをめぐっての思索を続けているといってもよいのではないか．

スーザン・ソンタグは，ベンヤミンのことをメランコリーの思想家と呼んでいるが，その憂鬱の気質には，失われたものに対するひときわ敏感な感性が潜んでいたとはいえないだろうか[6]．しかし，ベンヤミンの思考は，ロマン派とは違って反動的な方向性は取らない．確かに失われた過去に対する哀惜の念は深く，嘆きは大きい．だが，それだからといって過去を美的に形象化することで悦に入るということは彼の選ぶ道ではない．しょせん過去の再構成など原理的にもありえないのだ．このような虚構を維持しようとすれば，それは反動でしかない．政治的には，ファシズムということになるだろう．その意味で，ロマン派からファシズムへと確かに少なくとも一本の道は通じているのだ．この道をたどってしまえば，失われたも

（6）スーザン・ソンタグ『土星の徴の下に』（富山太佳夫訳）2007 年　みすず書房

のを愛惜するという生きた人の心情も失われてしまうことだろう．ベンヤミンは確実に現在時を生きる思想家なのだ．また，失われた過去から目を転じて未来へと前進的に向かうのでもない．ベンヤミンにとって進歩という観念ほど縁遠いものもないだろう．これもまたもうひとつの荒涼へと導くのである．ベンヤミンにとって人類史のある決定的な結節点は踏み越えられてしまっているのだ．近代を徴づける進歩などというあまりにも楽観的な信仰はもはや疾うに効力を失っている．アドルノとホルクハイマーも後に『啓蒙の弁証法』(7)において，近代の原理である啓蒙思想が20世紀において疾うに克服したはずの野蛮状態，それも未曾有の野蛮を引き起こしたというパラドックスを語っている．ベンヤミンは，このような進歩的未来の観念に憂愁の人として対峙したのだと思われる．これらの過去へ向けられるまなざしと未来へ向けられるまなざし双方に決定的に欠けているのは，現在時である．

2

ベンヤミンにとって，過去は現在時において断片として廃墟のなかに立ち現れる．それがかけらであることはいかんともしがたい事実であって，そこから推量してその全体像を思いみるしかない．それは決定的に失われているのだから．しかし，同時にそのかけらは，かけらでしかないにしても，おそらく比類のない確実な手がかりでもある．なぜならば，それは唯一具体的なものとして目の前に存在しているからである．ここからいわば考古学の手法で過去を構想してみるのである．ベンヤミンは，『ベルリン年代記』(8)のなかで次のように現在時と過去とのかかわりについて記して

（7）Theodor W. Adorno／Max Horkheimer, Dialektik der Aufklärung, Frankfurt am Main

（8）Walter Benjamin, Berliner Chronik, Gesammelte Schriften Band Ⅵ, Frankfurt am Main 1985

いる．

> 記憶は過去を探知するための道具ではなく，まさにその現場である．大地が，死滅した都市の埋もれている媒体であるのと同様に，記憶は体験された過去の媒体である．埋もれた自分の過去に近づこうと努めるものは，発掘する者の姿勢をもたなければならない．これが真の想起という作業の主調と態度を規定するものである．…（中略）… 事実関係は単なる成層であり，地盤に過ぎず，おそろしく綿密な探求によってはじめて，そこから，地中に隠れている真に貴重なものを取り出し確保することができるのだ．(9)

しかし，ここに注意すべき点がある．全体像はすでに失われているのであり，かけらの集積がそれを復元するのではないということだ．断片を収集しても，部分がすべてそろうということも難しいだろう．それにあらかじめ全体を規定するべき設計図が用意されているわけでもない．ここで問われるのは，構想力，想像力であろうが，それはもはや考古学というよりも錬金術の領域であろう．おそらくこれまで存在したこともないような全体性が構想されるからである．そもそも全体というものは，はじめから存在したのだろうか．かけらとしての部分があるからにはとうぜん全体があったに違いない．だが，現在時に生きるわれわれにはそれを垣間見ることさえ拒まれている．それにもかかわらず，またそれだからこそ，われわれはそれを求める．地上に生きるわれわれには，そのようにして望まれる全

（9）Walter Benjamin, Berliner Chronik, Gesammelte Schriften Band Ⅵ, Frankfurt am Main 1985, S. 486 なお，本論文中の引用は，原語にあたっておこなったが，晶文社版ベンヤミン著作集第 10 巻（幅健志，山本雅昭訳）および第 12 巻（小寺昭次郎訳）そして，岩波文庫版ベンヤミン『暴力批判論』『ボードレール』（野村修編訳）を参照させていただいた．啓発されるところが実に多く，深く感謝する次第である．

体性しか存在しないのだ．しかしまた，われわれがかかわりあえる世界でこそ，それが構想されるとも言えるであろう．ひょっとしてそれが原初の全体像と一致するかどうかの保証はどこにもない．しかし，われわれの志向性においてそれへと接近することは可能かもしれない．それには，現在時に生きるわれわれの強力な働きかけが要求されるであろう．断片の観察者は，もはや単に見る人ではなく，幻視を伴った視覚を投入することとなろう．それは，丹念に断片を観察し，断片同士をつなぎ合わせる営為のうちに，原像ではないとしても幻像としての全体像を見る可能性を追求することだからである．

ここであらためて考えておくべきことがあるように思う．それは，原像それ自体にわれわれはかかわることができないということである．もちろんそれがなかったといえば探求の営為そのものが意味をなさないことだろう．すべては，個別の脳髄のなかの幻想にとどまるか，茫漠たる相対性の世界に行き着くことであろう．ベンヤミンは，明確に真理ということを前提にして思索を進めるのである．しかし，決定的に失われた原像は，たぶん一回性なのであろう，決してそのままの形で再現はされないのである．歴史のなかにあるわれわれは，その都度の現実において，それをその真理性に向けて幻視する以外に，それに迫ることはできない．この地上に生きるものの課題は，それ以上でもそれ以下でもないといえよう．こうもいえようか．絶望的困難さに囲繞されたわれわれ地上の人にこそ，真理とも言うべき原像を幻像として垣間見る可能性が与えられているのだと．これを歴史的過去の側からわれわれに託された課題だとベンヤミンは捉えている．過去はそのまま顧みられなければあくまでも廃墟にとどまる．ここでベンヤミンは，救済という概念を使う．それは，事物が捨て去られて，嘆き悲しんでいるからである．ひとの営みが原像という真理を目指すものであれば，その努力は救済へと向けられる．それは，過去を克服した前進的未来がこれから開かれるというのではなく，現在が過去を救済することによってわれわれが現在時を生きることができるということでもある．

時間は，過去から現在を経由して未来へと連続的，直線的そして単線的に流れるのではない．廃墟である過去と深くかかわることによって，現在時が生かされてくるのであり，これは一種の時の往還運動である．こうして，時間は過去と現在の間を生き生きと循環的にまた重層的に運動し豊かさを増してゆく．また，過去が現在へと突き刺さり，現在時が異様な輝きをおびる一瞬があるのだともいえる．ベンヤミンは時間の連続的な進行をひどく嫌う．

> 通過時間ではない現在時，そこで時間が立ち止まり停止した現在時の概念を歴史的唯物論者は手放すことはできない．(10)

> 歴史という構造物の場を構成するのは，均質的で空虚な時間ではなく，〈現在時〉によって充塡された時間である．(11)

ここに語られているのが過去と現在の衝突であるが，現在時は一瞬であれ停止を余儀なくされる．ここで時間は，立ち止まることによって，連続性を破られるだけでなく，一方向的な直線性を脱して面的あるいは立体的な展望を持つにいたる．それは，ただ現在時が拡張されただけではない．過去と現在という二つの相異なる世界のいわば弁証法的展開を経て生じた新しいあえて言えば祝祭的時空なのだ．ベンヤミンは，フランス七月革命の闘争第一日目の暮れ方パリのあちこちで時計の文字盤が射撃されたというエピソードを引用しながら，革命の時空をこのように捉えている．

> 暦は，時間を時計のように数えるものではない．それは，…（中略）…歴史意識の記念碑なのだ．(12)

（10）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 702
（11）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 701
（12）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 701

ベンヤミンは，停止した現在時の概念の正当性を，それが歴史の書き手が書いているまさにその時間すなわち現在時を定めることにおいている．見事に即物的である．そして，書き手は，過去を断片として具体的に提示しなければならない．ここには書き手と過去の，また現在と過去との繰り返しのできない一回性の出会いと衝突があるはずである．ここにすでに弁証法的展開が認められるのであろうか．この点は，はなはだ評価の難しい，しかも重要な点なので，後述することにする．

> 歴史主義は，過去の〈永遠の〉像を提示するが，歴史的唯物論者は，過去という目の前にある唯一のものの経験を提示する．(13)

もちろん永遠の姿など安易に語れるはずはない．そのような言明は，みずから過去の断片を放擲していることを意味するだけではなく，現在時を生きていないということにもなりかねない．現在と過去の衝突という契機を取り逃がしてしまっているからだ．ベンヤミンの支持する歴史的唯物論者は，過去の断片をそれ自体かけがえのないものとしていわば熟読玩味する．さらにそれを自己の経験として昇華させ提示するというのだ．ここでいう経験は，きわめて具体的なかれの現在時と過去の往還運動そのものである．ベンヤミンは，勇ましくも「かれ（歴史的唯物論者）は，自分の力を保ちながら，歴史の連続というものを打破しうる男だ」(14)というのである．

断片として，ということは目の前に具体的に存在する過去の細部は，歴史家によって隅々にいたるまで捨象されてはならず，そのまま保存されなければならない．なぜなら，それが現在時を生きるかれと過去との唯一の接触面だからである．仮に今両者の間に火花を発し，新たな次元を切り開

（13）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 702

（14）Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 702

く劇的な展開が起こらないとしても，いずれそれは，われわれとの衝突を待っているといってもよい．

「かつて起こったことには，何ひとつとして歴史的に無意味なものはない．」[15]というのは真理だとベンヤミンは指摘している．それは，次のような文を引き出す．すなわち，「人類は解放されてようやく，その過去のあらゆる時点を引用することができるようになる．人類が生きた瞬間のすべてが，その日に引き出して用いることができるのだ．」[16]これは，認識の最終段階，ベンヤミンがいう最後の審判の日のことであろう．まだ，われわれにその展望は開けてはいない．しかし，そのためにこそ過去の断片は，厳密に保存されなくてはならないのだ．さもなければ，われわれは都合よく断片を取捨選択しながら，永遠の歴史像を語ったり，恣意的に歴史を解釈するのが落ちであろう．これでは，過去を救済するどころか，それとは無縁な歴史家の脳髄の世界を展開するだけのことであろう．われわれは，逆に過去の断片によって，現在の思考を正されなければならないのだ．これが，現在と過去の格闘であり，歴史の弁証法の意義であろう．そのためにも断片は，図像的にも具体的でなければならない．それが抽象的なものならば，ひたすら現在の人の考えによって歴史を語ることも容易にできるだろう．しかし，具体的なものを語るということは，それによって人の思考が鍛えなおされるということなのだ．これがベンヤミンの歴史的唯物論の核心ではないだろうか．ベンヤミンが具体的なものをめぐる思想家であることは，つぎの一節からも読み取れるだろう．

> テキストとは，しだいに濃密さを増す内界の森林を通り抜けてゆく街道なのだが，それがどのように切り開かれていったかということは，たんに読むものにはわかるものではない．なぜなら，読むものは夢想

---

(15) Walter benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 694

(16) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 694

という自由な世界にあって，自我の動きに従っているに過ぎないのだから．これに対して書き写すもののほうは，その自我の動きを，絶えずテキストの動きに従わせている．(17)

ベンヤミンの思考における時間のありようは，精神と感覚が現在時と過去を互いに照らし合わせ，互いに他を止揚することによって思いもかけない火花を散らすことがある．それはたしかに往環運動ではあろうが，同じ軌跡をたどることはない．そのたびに新しい軌跡を残すはずである．なぜなら，現在時は絶えずあらたに更新されているからであり，それが取り組む過去の様相もそれに応じて異なり，新しい関係性を作り出すからである．しかも，それが起こるのは一定の方法論に則ったものでもなければ，予定調和的なものでもない．それは，不意打ち的にわれわれを襲うのである．その経験は，一回性である．

3

そして，その表れにも注意しておきたい．この出来事は，概念や理念といった抽象物を生み出すことはなく，あくまで具体的な図像すなわちイメージを喚起するということだ．理念の歴史が整然と直線的に連続していくのではなく，イメージの歴史がそれを打ち破り，断続的に形象の堆積物を作り上げるのである．これは，われわれにとって美的衝撃という経験を意味するであろう．もちろんそれは永遠の美などという代物ではない．時間的持続は保証されていないが，そのぶん輝きは強烈である．

過去の真実のイメージは，一瞬しか現れることはない．さっときらめくイメージとしてしか過去は捉えられない．(18)

---

(17) Walter Benjamin, Einbahnstraße, Frankfurt am Main 1972, S. 90

おそらく，われわれの現在時には決定的瞬間というものがあるのだ．「認識を可能とする瞬間を捉えそこなえば，もうおしまいなのだ」[19]とベンヤミンはいうが，その瞬間は，きわめて濃密な時間のはずである．かれはそれを「危機の瞬間」だといっている．安定的持続的で均質な時間ではなくて，命がけの跳躍が試みられるような瞬間こそが要請されている．ベンヤミン自身がそのような危機の時代を生きたというばかりではない．おそらく日常においてもベンヤミンの世界認識の姿勢は，そのような危機意識に貫かれていたのだと思われる．かれは，徹頭徹尾ラディカルな批評家であるが，この批評家は文字どおりすすんで危機に立っていたのである．Kritik は，批判，批評であり，同時に危機を意味する．この点でベンヤミンは，かれが心から愛着を寄せるヘルダーリンを思わせずにはいない．そのような瞬間にこそ過去の断片は，その輝きを発揮する．それを受け止めそれに生き生きと反応できる瞬間を持つというのは，もはや個人の選択の結果とはいえない．それは，まさに運命という以外にはない．それがいかに狭隘な道とはいえ，ひとは，それをたどらざるを得ないのである．

> 過去の一度限りのイメージは，それが向けられた相手が現在時であることを，当の現在時が悟らない限り，現在の一瞬一瞬に消滅しかねない．[20]

ヘルダーリンは，「危機のあるところに，救済するもの生い立つ」[21]と大胆にも歌ったのであり，ある瞬間に賭けたのである．かれがめざしたのも比類のない大胆なイメージすなわち詩的形象であった．詩人の現在時は，

---

(18) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 695

(19) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 695

(20) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 695

(21) Friedrich Hölderlin, Patmos, Sämtliche Werke und Briefe Ⅰ, München 1992, S. 447

緊張をはらんでいる．少なくともまったく異なるものとの出会いの用意は整っているのである．このような出会いは，もちろん望まなければかなうはずもないが，かといって単に意識的主体的努力で招来できるわけでもない．謙虚に過去の断片に向き合うことしか方法はないのかもしれない．これを歴史家と過去の断片という具体的なものとの弁証法的関係性というべきだろうか，そのプロセスは，容易に解明できないが，そこにはなんらかの飛躍があるはずである．ベンヤミン自身もあえて「さっとひらめく歴史の真理」といってみたり，「危機の瞬間にひらめく回想」ということをいうのみなのである(22)．

> 歴史的唯物論の課題は，危機の瞬間に思いもよらず歴史の主体の前に出現する過去のイメージを把握することである．(23)

過去のイメージは，思いもよらず出現するというのである．通常の唯物論的弁証法とは相容れぬことはたしかであろう．歴史的必然というのではなく，過去の断片との直接的な衝突によって事態が一変し，思いがけずもイメージ世界が出現するのである．予定調和的な展開としてではなく，不意打ちとしてわれわれを襲うのである．これは観念的世界ではありえないことだ．しかも，そこに開けてくるのは，あらたな概念ではなく，既成の概念を打ち破るイメージだというのだからほかに類を見ない歴史の弁証法であるといわなければならない．

このようないわば命がけの跳躍をこころみるには，たんなる形式的論理は破られなければならないが，もうひとつベンヤミンが厳しく退けるものに感情移入がある．対象に対する距離の感覚である．これがなければ，感情移入はけっきょく歴史の勝者に与することになるのだという．ここでも

(22) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 695

(23) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 695

この弁証法のよりどころは，過去の断片それ自体にしかない．それと果敢に，また粘り強く取り組むためには，安易な感情移入では始まらないのである．自分に都合のよい，あるいは心地よい物語を作る必要はないのだ[24]．そして，何よりも要求されるのは，そのような志向性をささえる勇気である．論者は，ベンヤミンの批評言語総体に深いペシミズムとともに比類のない圧倒的な勇気をおぼえるものである．

> 怠惰な精神は，さっとひらめく真の歴史のイメージを捉えるに足る勇気を持たない．[25]

4

しかし，その勇気とは蛮勇ではない．むしろ物自体に慈しみをもって，慎重にかかわるための繊細さを備えた粘り強い勇気なのである．ここで再びヘルダーリンを引き合いに出してもよいだろうか．詩人は，一卵性双生児ともいうべきふたつの作品「詩人の勇気」と「内気」を書いている．この詩人の場合ほとんど通例のように，改稿と推敲を繰り返すが，この二作品ほど趣の異なったものに仕上がった例も珍しいだろう．ここで注目したいのは，ふたつの詩によって，勇気というものの内実が謙虚さと大胆さを含む実に奥行きをもったものだということを知らされることである．この点は，まさにベンヤミンの気質に共鳴するものとはいえないだろうか．じっさい，ベンヤミンは，このふたつの作品を取り上げ，とくに詩人の「受動性」に着目している[26]．絶対的受動性がかえって力となりうるという

---

(24) ベンヤミンは，『ベルリン年代記』のなかで「思い出は物語的に行われるのではなく，報告的になされるのでもない．」(S. 157) と警告の調子で述べている．

(25) Walter Benjamin, Über den Begriff der Gescichte, S. 696

(26) Walter Benjamin, Zwei Gedichte von Friedrich Hölderlin. »Dichtermut«

詩世界におけるパラドックスであるが，これはベンヤミン自身の過去の断片と取り組む姿勢そのものとも思われるのである．

ベンヤミンがブルジョア的と規定する通常の歴史主義は，あたかも均質な時間が流れていたかのように，人々の営為とその結実である文化を平板化し，ある意味でわかりやすく記述し伝えようとする．ようするに，勝利を収めた現在の状況にあわせた物語を作り上げるのだ．このような振る舞いは，ベンヤミンにいわせれば，たんに安逸を貪るなどということではなく，野蛮ということになる．文化そのものが野蛮だというだけでなく，その伝達すなわち歴史記述も野蛮だということである．このような状況に対して，ベンヤミンは，歴史的唯物論の課題として，簡潔に「歴史を逆なでする」ことを対置する．歴史主義の内部における戦いではなく，歴史主義そのものを打ち破ろうとしているのだ．

ここで展開されるべき歴史学は，一方では危機に立つ学である．過去の断片がわれわれに，認識の更新を迫るのである．

> 抑圧された者の伝統は，われわれがそこに生きている〈非常事態〉が，非常ならぬ通常の事態であることを教える．(27)

危機の学としての歴史学は，現在時と過去を劇的に接合させるので弁証法的構図を持つことはできる．しかし，その内実を考えてみれば，問題的である．その弁証法は，少なくとも現在と過去を止揚し解消するものであってはならないからである．ベンヤミンのいう歴史的唯物論は，過去は断片としてしか確認できないが，それは原像を幻像として浮上させることはあっても，その断片の形を失うことはないのだ．細部は細部として維持さ

—»Blödigkeit« Gesammelte Schriften Ⅱ・1, Frankfurt am Main 1977 この論のなかで，ベンヤミンは，ヘルダーリンにおける「勇気ある者の本質である完全な受動性」を指摘している．

(27) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 697

れながら，志向性としての全体像がイメージされるのである．これは，そもそも弁証法と呼ぶべきものだろうか．細部がどこまでも生きているばかりか，ますますその輝きを増しているかに思われる点をさきに問題的といったのである．現在時と過去，そして人とものが直接的に接合され，なにか爆発的な展開が起こり，予想もつかない世界が現出しているのである．論理性もあまり作用していない．すべてが一挙に，突然起こるのである．すくなくとも，論理学の世界ではないことはたしかだ．飛躍が大きすぎるのである．ある意味でこれは，世間知を身に纏っていない少年の幼児性を示しているといえるかもしれない．しかし，考えてみれば，弁証法でいう質的転換とは飛躍に他ならない．その意味では，ベンヤミンの思考も弁証法の本道を大胆に歩んでいるといえるかもしれないのだ．とはいえ，細部がいつまでも細部としてとどまること，そしてそれがあまりにも，ということは全体像を凌駕するほど精彩を放っていることが特異である．通常の弁証法的論理を逸脱するところだろう．論者は，この点がベンヤミンの思考の第一の特徴だと思っている．過去の具体的な断片が熟読玩味され，ある瞬間に思いもかけないイメージを展開するのである．断片の魅力は少しも減ずることはない．

来るべき歴史学は，こうしてイメージとして展開されるという目覚しい特徴を持つ．いかなる断片も独自の形を持つ．そしてある断片と別の断片は，複合的な図像を作る．このようにして部分が増えれば増えるほど全体として図像は複雑化し，また何かに向けて統一化し，収斂するする可能性を持つ．これを作るのは，歴史家である．ベンヤミンは，Konstellation（星座）という見方を好んで使っている．星座がはじめから存在するのではなく，個々の星をある配置のもとに図像化することによって得られる形象がそれであろう．それゆえ誰が手がけても同じ図像が得られるわけではない．また同じ者でも，置かれた状況によって異なる図柄を描くかもしれない．このように過去のイメージは，歴史家の現在時によって個別的に，また具体的に規定されながら切り開かれていくのである．ベンヤミンは，

きわめて独特な批評的思索家であったが，それはなによりもその形象化，図像化の独自性によっていると考えられる．

その独自性は，あまりにも途方もないもので同時代から孤立を余儀なくされていたのではないか．教授資格論文として提出されたバロック演劇論が当時のフランクフルト大学から明確に拒絶されたという事件もベンヤミンの学問のあり方を強烈に照らし出すことであろう．そして，彼の弁証法理解に関して，看過できない出来事がある．それについて触れておきたい．ベンヤミンは，パッサージュ論を 1929 年に中断しているが，その経緯にまつわる事情である．ベンヤミンは，かつて「パッサージュ――弁証法の妖精の国」という風変わりな題名まで考えていた断片を，かれの僚友であったアドルノやホルクハイマーたちの前で朗読し，その後の議論で大いに批判されたのだという．その批判の的は，「社会史的観点とアドルノが呼ぶ要素，つまり彼らなりに解釈されたマルクスの弁証法的思考が欠けていることに関してであった」(28) ということだ．ここでいわれているマルクスの弁証法というものがいかなるものかは，つまびらかではないが，否定の弁証法を大々的に展開するアドルノにとって弁証法という思考法は譲れぬものであったに違いない．それに対して俎上に載せられたベンヤミンのテキストは，副題に当初「弁証法の妖精の国」と名称まで考えられていたというのも皮肉だが，いかにも理論派アドルノの好個の批判の餌食になってしまったという趣がある．ベンヤミンは，無防備だったのである．彼によって提供されたのは，基本的に 19 世紀のパリという世界の断片そのものであったのだから．あえて言えばその幼児性を指摘されても仕方なかったのであろう．そこにアドルノ流の観念的な弁証法の展開を期待することはできなかったのである．しかし，まさにこの点が重要である．なぜなら，ベンヤミンの歴史的唯物論の弁証法は，ひたすら具体的な過去の断片を観

(28) このあたりのいきさつに関しては，1993 年岩波書店刊　ベンヤミン『パサージュ論』の日本語翻訳に付せられた三島憲一氏による「『パサージュ論』のテクスト成立過程の素描」に依拠するものである．

察することにその主眼があったからだ．細部が全体を凌駕するほどだったのだ．そして，ある一瞬現在時と過去が火花を散らし，特異なイメージを展開するのである．このようなプロセスを弁証法と呼ぶのは，難しいであろう．ベンヤミンは，弁証法に含まれる飛躍の部分の論理的構造を信じていなかったのではあるまいか．そういったものを維持するより，過去の断片という細部が概念へと解消されることを恐れていたように思われる．それほど細部に魅了される感覚の持ち主だったのである．かれがたとえば「パッサージュ論」を構想するにあたって，すべてが引用からなるテキストを理想としていたというような途方もない企ては，そのようなかれの資質を如実に反映している．アドルノにとっては想像にあまることであったに違いない．アドルノも弁証法の否定のプロセスを強調することによって，弁証法に新しい光を当てたことは事実だが，ベンヤミンのようにその根底まで論理を開き，根源的な飛躍の輝きを達成するということはなかったであろう．当然ここにはイメージという図像的，美的な契機が深くかかわっている．アドルノが晩年『美の理論』(29)にかかわるのも，ベンヤミンへのオマージュのひとつだったかもしれない．そして，危機の瞬間という現在時と過去の断片との超絶的弁証法の衝撃に対する反応としてたとえば『ミニマモラリア』(30)が書かれたのかもしれないと想像することも許されることだろう．

5

ただし，感覚の問題は争うことができない．このことは，かれの歴史論にのみ該当することではない．過去に関する論考は，すべてこのような特徴を持っている．アドルノが『ミニマモラリア』を書くにあたって強く意

(29) Thodor W. Adorno, Ästhetische Theorie, Frankfurt am Main 1970

(30) Theodor W. Adorno, Minima Moralia, Frankfurt am Main 1962

識したのは，かれの手によって作者の死後まとめられた『ベルリンの幼年時代』(31)と『一方通行路』(32)であろうと思われる．このベンヤミンの二作とりわけ『ベルリンの幼年時代』は，作者にとってまさに「失われたときを求めて」である．

> 1932年，国外にいたときにぼくは，ぼくの生まれた都市からの比較的長い別離，ひょっとすると永遠の別離に，遠からぬうちに迫られざるを得ないだろうということを，はっきりと自覚し始めた．(33)

これが，1987年になってようやく刊行された版の前書きの書き出しである．ベンヤミンは，当時パリに滞在していた．ナチスの政権奪取の直前の故国の状況を考えれば，ユダヤ人のベンヤミンにとって帰国は日に日に難しくなったであろう．1900年ごろの幼年時代から遠くはなれ，また生まれ故郷ベルリンからも決定的に引き離されようとしている．かれは，実質的に1900年頃のベルリンの幼年時代を決定的に失ってしまっていたのである．かれの「失われたときを求めて」は，ベンヤミンの自制の姿勢にもかかわらず，異国の地にあって郷愁の念と幼年時代に対する憧憬に深く染められている．作者は，「ぼくは，二度と帰らぬ過去の偶然的自伝的なことにではなく，必然的社会的なことに目を向けることによって，憧憬の感情を抑えることに努めた．」というのだが，かれは，努めたのであって，抑えきれたのではなかろう．そうであるからこそ，幼年時代の断片の数々が生々しく提供されるのである．しかし，かれ自身が言うように「自伝的」「連続的」ではなく，「経験の深みの中に浮かび上がる」「イメージ」として与えられている．イメージとは，たんなる記憶の呼び起こしではな

(31) Walter Benjamin, Berliner Kindheit um Neunzehnhundert Frankfurt am Main 1966

(32) Walter Benjamin, Einbahnstraße, Frankfurt am Main 1972

(33) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, Frankfurt am Main 1987, S. 261

く，「自伝的スケッチ」でもない．それは，深く書き手の現在時とかかわっている．そもそも過去は決定的に失われているのだ．回想の核心をなす事象は，もちろん事実としてあったはずである．それをまた記録としてとどめることは可能かもしれない．しかし，それは断片化されているのであり，その断片もすべて揃っているわけでもない．目の前にあるのは廃墟である．こうしたなかで，失われた過去はそれら断片を基としながら書き手の現在時によって充塡されることによって，イメージの次元がひらかれるのである．注意すべきことは，現在が対象から地理的にも，時間的にも離れていればいるほど，イメージの展開は，強度を増すという逆説があるということだ．これは，距離の大きさに比例して憧れの心が痛切さを増すということばかりではない．かえって現在時が，過去の断片によって充塡されて鋭敏さを増し，イメージ形成という弁証法的展開を惹起するのである．「ベルリンの幼年時代」は，ベンヤミンにとって失われたときを求めての哀切きわまりない試みだったのである．このような異例の密度を持ったイメージの結晶化は，もっとも大事なことがらを決定的に失った危機にある者にしか可能ではなかったのではないか．

たとえば，幼いころ耳にした「せむしの小人」(34)の「かわいい子供よ，お願いだ，ついでに，祈っておくれ，このせむしの小人のために」という切ない願いの声は，長い時がたった今でも，「ガス灯の燃える炎のかすかな音のように，世紀の境をこえても僕の耳にささやきかけてくる．」これもたんなる回想や幻想ではない．せむしのかすかな声が確かに聞こえているのは間違いない．小人に出会ったのは幼時だったかもしれないが，そのイメージは，はるか後年このような形でわれわれにも伝えられているのである．また，童謡の「ムメレーレンおばさん」(35)の視線が，「たった一度でも僕に向けられていたなら，僕は生涯，安らかの気持ちでいられただろ

(34) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, S. 162

(35) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, S. 69

う」というのも，その存在がいまでも作者をとらえていたことをはっきりと物語っている．「ティアガルテン」(36)における幼時の迷宮発見の話はどうだろうか．ベンヤミンは，卓越した迷宮の探求者である．その道連れは，ひたすらかれの感覚である．それは，ベルリンのある橋のゆるい湾曲から始まる．ベンヤミンは，そこにすでにアリアドネがいたのだ主張している．これがその時の，また後年の迷宮への旅路の始まりだというのである．都市という迷宮を歩くには，しかし，技術がいるというのだが，それは，「様々な街路の名が，乾いた小枝が折れる時のように聞こえてこなくてはならないし，都心の路地という路地が，山中の窪地のように，くっきりと時間の推移を映し出していなければならない」というようなものだ．ベンヤミンといえどもこれは，後年習得したものだという．そして，「幼い僕のノートにさしはさまれていた吸い取り紙に描かれた迷宮の図柄が最初の痕跡であった夢は，この技術によってかなえられることになった」と語られているが，原点は，やはり幼時の夢なのである．夢は夢のまま残り，しだいに技法化されていくとともに現在時を打つ．ベンヤミンは，生涯この方法的展開と形象化を図ったといえるのではないか．動物園の「かわうそ」(37)の観察の細やかさは，ボードレールの散文詩に匹敵する．このような対象に対する関心の強さは，特筆に価すると思われる．後年になって技法が鍛えられても，ものごとが一般的概念や観念に昇華され，解消されることはないのだ．それに代えて，類まれなイメージが生み出される．

かけがえのないものが失われたという感情はベンヤミンのテキストのあらゆるところを貫いている．これは，過去を堆積した現在時の風景を廃墟と見ることにつながる．まずは，その前に佇んで途方にくれる以外にはないだろう．

---

(36) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, S. 9

(37) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, S. 56

かつては，時間と空間の親密な仲間だった子供は，いま，かれのロッジアで同じ仲間に囲まれながらも，まるでかれに以前から用意されていた霊廟の内にいるかのようである．（ロッジア）(38)

しかし，その観察は次第に熱気をはらむようになる．過去が過去である実質を失うことなく，変容を遂げなければならないということである．これは，過去のかけがえのなさはいかんともしがたいが，それがイメージ化されなければならないということにつながる．

僕は希望するのだが，このようなイメージからは，そこで語られる人が，後年になって，彼の幼年時代には恵まれていたものを，いかに大きく喪失することになったかということを，うかがい知ることであろう．（前書き）(39)

これらの喪失された数々のものは，ベンヤミンの場合，著作『ベルリンの幼年時代』という形で豊かな実りをもたらすのである．そこには，一種の幼児性とそれの認識論的なイメージ化という不可分の特徴がまぎれもなくうかがえる．

かれら（教育学者）には，世界が，子供の注意を惹き，子供の遊び道具となるような物，とても比類ない物に満ち溢れているのが，見えなくなってしまっているのだ．…（中略）…子供たちは，物にかかわる仕事が進行している現場へであれば，どんなところでも並々ならぬ関心を持って駆けつけていくものなのである．かれらは，工事の際に，庭や屋内の仕事の際に，また裁縫師や指物師の仕事場で生まれてくる

(38) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, S. 144

(39) Walter Benjamin, Berliner Kindheit, Frankfurt am Main 1987, S. 261

屑に惹きつけられてやまない．生まれてくる糸屑木屑に，物の世界がまさにかれらに向けて，かれらだけに向けて見せる相貌を認めるのである．その屑を用いて子供たちは，大人の仕事を真似るというよりも，遊びのなかでそれらから何かを作り上げることによって，いろいろな素材を飛躍的に，あらたな関係性のなかへ移し変えてしまう．このように，子供たちは，自分たちのために固有の世界を，マクロコスモスのなかのミクロコスモスを，自らの手で作り上げてしまう．（「工事現場」『一方通行路』）(40)

ここに述べられている子供の創造的造形術は，ほとんどそのままベンヤミン自身によって実践されているといってもよいだろう．ここで，パウル・クレーの絵画の世界を連想するのは自然というよりも，必然的な飛躍であると思われる．クレーの夢幻的でしかも知的精神的な画面は，根底に幼児のイメージを持っていることは確かであろう．もちろん，芸術家クレーの絵画は，すみずみまで高度な技法で処理されたものであり，強い精神性に浸されており，幼児的なものではない．しかし，その主題のまた造形上のモチーフは，幼児からもたらされている．幼児の世界が画家の愛着の対象であることには疑いはなかろう．ここには，画家クレーの対象に対する距離が問題としてかかわっているのである．かれは，「思い出を伴う抽象」とか「涼やかなロマン主義」ということを語っているが，重層的なイメージの展開の際に，幼年時代を中核とする失われた世界の具体的な夢の残滓を引き寄せずにはいられなかったのではないか．このような距離感を含んだ時間と対象に対する展望という点において，クレーとベンヤミンの間には，深く親和的に通底するものがあったと思われる．

じっさい，ベンヤミンが『歴史の概念について』において，クレーの「新しい天使」について述べているのは，このような意味で意義深いこと

（40）Walter Benjamin, Einbahnstraße, S. 21

である．そもそもベンヤミンは，図像的思考を得意としていたことに注意しておきたい．ここでは，ベンヤミンのクレーの図像との関わり合いが問われるのである．その読み取りの仕方，すなわちイメージの展開のさまを見てみよう．

> 〈新しい天使〉と題されたクレーの絵がある．そこには一人の天使がえがかれており，その天使は，かれが見つめているものから，今にも遠ざかろうとしているところと見える．その目は大きく見開かれていて，口は開かれ，翼は広げられている．歴史の天使はかようなものに違いない．かれは顔を過去へと向けている．われわれならば事件の連鎖を見て取るところに，かれはひたすら破局だけを見る．その破局は，絶えず廃墟の上にまたは廃墟を積み重ねていき，それらをかれの鼻先へと突きつけてくるのだ．おそらくかれはそこに立ち止まり，死者たちを覚醒させ，破壊されたものを寄せ集めては組み立てようとしているのだろうが，楽園から吹きつけてくる強風がかれの翼にはらまれるだけではなく，その風はあまりにも強烈なので，その天使はもはや翼をたたむことができない．その強風はかれを，背を向けている未来の方へと有無を言わさず運んでいく．その一方，かれの目の前には廃墟が山のように天に届かんばかりに堆積する．われわれが進歩と名づけるのは，まさにこの強風なのだ．(41)

クレーの図像に触発されたベンヤミンは，さらにもうひとつの図像の世界を切り開いたのだ．この記述は，ベンヤミンによってなされたクレーの図像のイメージの解読であるとともに，ベンヤミン自身の歴史認識の原型を，やはりイメージとして展開したものといって間違いないだろう．それは，具体物からイメージへの飛躍的展開である．ここにも，具体性の弁証

(41) Walter Benjamin, Über den Begriff der Geschichte, S. 697

法の鮮やかな例を見ることができるように思われる．ベンヤミンは，具体物にあくまでも執着し，説明的なプロセスを一挙に飛び越え，比類のない飛躍を遂げるのである．これは，通常の意味での弁証法とはいえないかもしれないが，ベンヤミンは，根源的なところで弁証法の命である飛躍を，思弁としてではなく，実践として成就してみせるのである．この意味で，アドルノが否定の弁証法を主張するのであるならば，玩物喪志ともいえそうなベンヤミンの思想の展開を具体性の弁証法と呼んでもよいのではないかと思われる．それは，ベンヤミンの生それ自体であって，それについての説明は，われわれにも，作者当人にも拒まれているように思われるが，そのイメージが鮮やかに言葉として具体的に与えられていることは，それに接するわれわれにとって確かである．その言葉の触発する力に驚くほかない．